

北の事務から 2011 連携

～ふらのフォーラムに参加して(番外編)～

特別企画 PART 2 富良野

地域コミュニティを 活性化させる学校

番外編 

尾崎 公子 兵庫県立大学

はじめに

「飲んだくれ達」の酒屋談義から実を結んだという「ふらのフォーラム」に呼んでいただき、トライアスロンと名付けられた講演3連発をちょっと息を切らしながら担当しました。私からの問題提起に対して、コメンテーターと指定討論者が用意され、現場と研究者の言葉をぶつけあい、重ね合わせながら、双方向の議論ができる刺激的なフォーラムでした。

フォーラムの詳細については、天野さん

が紹介されていますので（本誌10・11月号）、本稿では、番外編として、フォーラム終了後のフィールドワークで出会った実践例を紹介したいと思います。

富良野市の地域課題～集落内の コミュニケーション不足～

現地実行委員の方々の案内で訪れたのは、富良野市の東に位置する麓郷小学校、布礼別小中併設校、南東に位置する樹海小学校、樹海中学校、南富良野町の金山小学校です。金山小学校は児童数7名です。他の学校も45名の樹海小学校を除けば、20人

前後の小規模校です。

児童・生徒数の減少によって、学校の小規模校化が加速しているのは、この地に限ったことではないでしょう。背景には、過疎化、都市化、高齢化といった地域の諸問題があります。富良野市は、人口流出を食い止め、さらに人口流入を図るために、「地域の魅力の発見、資源の発掘、求心力」が必要だとして、問題点の洗い出しを行っています。そこで指摘されているのが、集落内のコミュニケーション不足です。

「農協合併や高齢引退非農家の会合不参加などで、意思疎通を図る機会が少なくなっているために、延長保育の短縮、コープの廃止、バス路線の縮小等、生活インフラの悪化が進行していても、それを食い止める具体的な動きがとれなくなっている。

こうした状況が、地域の魅力を失わせ、人口流出を招いている。だから、コミュニケーション不足を代替する組織や施設の設立が必要だ」と分析しています（北海道大学大学院農学研究院『富良野市農村資源及び人材活用調査報告書』2011、参照）。

でも、新たに組織や施設を設立しなくても、学校がその代替機能を果たすことは十分可能です。私が富良野で出会った事例は、現実にそうした代替機能を果たしているように思います。

学校は異年齢・異世代・多機関の扇の要

一般的に、小規模校には、集団規模が小さいために社会性を培うことが難しい、クラブ・部活動ができにくいということに加え、教職員配置の問題があります。こうし

た問題を解決するためには、小学校と中学校の縦の連携や横の連携を図っていく等、学校のネットワーク化を図ったり、地域資源を有効に活かしたりして、子どもたちの関係世界を広げる工夫が必要です。

訪問した学校も、集合学習、合同修学旅行・宿泊研修を取り入れています。これは、子どもたちのみならず、教職員の交流にもなっています。また、多彩な外部講師を無料で招聘することができるメセナ事業や富良野塾OBの演劇指導を活用し、地域の文化資源をうまく取り入れた教育活動が行われています。このように地域資源を学校に組み込む活動は、地域側にも新たなコミュニケーションを生み出しています。

例えば、樹海小学校は、地域住民が加わった縦割り班を編成しています。異年齢・異世代のグループを形成して、学芸会や収穫祭が行われているのです。「こどもだより」を児童の祖父母だけでなく老人会、ことぶき大学、地域の高齢者にも配布して、参加者を募ったところ、昨年度は40名の参加者がありました。老人会は地区別に組織されていますが、縦割り班は全地区を対象にしていますので、子どもだけでなく、地区を異にする高齢者同士の出会いももたらしています。学校には異年齢・異世代、そして多機関を結節させる、いわば扇の要のような働きがあるのです。

ちなみに、同小学校裏には「トリムの広場」と名付けられた、とても立派なアスレチック場が、学校事務職員とPTAをはじめとする地域住民によって整備されています。これも学校の結節機能が形となったものと言っていいでしょう。

樹海中学校の取り組み～「Made in Jukai Project」の可能性～

あともう一例、樹海中学校の事例を取り上げておきたいと思います。

樹海中学校（生徒数24名）では、学校農園で生徒がかぼちゃを栽培しています。かぼちゃ栽培の取り組み自体は、2001年度から「総合学習の時間」の一環として導入されていました。当初は校舎近くの農園を借用していましたが、2008年にテニスコート跡地を開墾して学校農園（約24a）が造成され、2010年には暗渠も整備されました。これにより本格的なかぼちゃ栽培が可能になり、多彩で、さまざまな人が関わる取り組みへと発展しています。

開墾、暗渠整備にあたっては、PTAや地域住民が油圧ショベルやトラクターなどの資材を提供し、作業にあたりました。苗作り、苗の定植、そして収穫についても、PTAやことぶき大学で学ぶ高齢者の協力がありました。また、有機農法を学ぶ学習会には、有機農業のコンサルタントが招かれています。講師は、そこで、農業と化学が結びついていることに触れ、これからの農業には学校の勉強が非常に大事だと生徒に伝えています。

昨年、収穫されたかぼちゃは2000個に及びました。それらは、富良野学校給食センターの「富良野ふるさと給食」や横浜市にあるレストランの食材として利用されたり、フラノ・マルシェ（市街地活性化のための複合商業施設）で販売されたり、福祉施設へ提供されました。フラノ・マルシェでの販売は、かぼちゃスープ、かぼちゃ団

子などの加工品も含まれ、調理にあたっては調理師からのアドバイスを受けました。

生徒たちは、この取り組みを「Made in Jukai Project」と名付け、生産、加工、販売、さらには売上金の効果的活用までも自分たちで担いました。売上金は約3万円也！総務部の生徒が、全校生徒にアンケートをとって使い道を決め、「卒業生を祝う会」用の大きなケーキ、プロジェクトを記念する「クリアファイル」を購入しました。ケーキは、職業体験でお世話になっている市内のお菓子屋さんのものです。

同事例は、地産地消、アントレプレナーなど複合的な可能性を持った教育活動であると同時に、地域のコミュニケーションを活性化させる事例としても注目されるでしょう。農園整備から始まり、栽培、収穫、販売の一連の過程には、実に多くの人々の関わりがあり、コミュニケーションを生み出しています。生徒たちは、そうした人々との出会いのなかで、自分たちの作業工程の意味や意義を確認し、教科的知識を生活文脈にのせる機会を得ているのです。

おわりに

私が富良野で出会った活動例は、教育課題と地域課題を架橋する取り組みと言えます。こうした取り組みを遂行するには、地域資源を把握し、それらを機能させるための実効的なプログラム、方法、仕組みが必要です。樹海中学校を例にとれば、「かぼちゃ」栽培という総合学習のプログラムが、多様なひと、機関、ことを有機的に結びつけています。「ひと」とは、PTA、地域住

民、外部講師、調理師であり、「機関」とは、ことぶき大学、給食センター、フラノ・マルシェ、福祉施設、レストランであり、「こと」とは、学習、開墾・暗渠、栽培、加工、販売です。かぼちゃが、地域資源をつなぐ媒介項となっているのです。

そして、諸資源をつなぎあわせているのが、学校の教職員です。富良野市では、「富良野市リーダーバンク（指導者名簿）」、職業体験の協力企業一覧が作成され、個人、企業、各種団体が学校に協力する仕組みが作られています。樹海中学校の教職員の渉外力、企画力、実行力で、それらがうまく活用されています。同校の事務職員である山本孝暢さんも、各種情報提供や財政財務の側面から、同取り組みを担われました。

ただ、残念なことに、かぼちゃの栽培活動は継続されていますが、来年度からの新学習指導要領の全面实施を控え、収穫後のプロジェクト活動が難しくなっているとのこと。でも、「教育課程特例校」一学校または地域の特色を生かし、学習指導要領等によらない特別の教育課程を編成

し実施することができる学校—といった制度もあります。子どもたちの血肉になる学びを地域資源を活かしながら編成し、実践できる力が無駄になってはもったいない！是非、教育委員会とも連携し、知恵と工夫によって、取り組みの継続・発展の途を見出してほしいと思います。

ふらのフォーラムの昼食でいただいた手作りカレーの味、忘れられません。実行委員長の佐々木雅臣さん自らがピーラーを片手に富良野野菜の皮むきをされたとか。2日日夜のバーベキューでは、富良野肉、北見の方が持参された魚介類、おいしいワインが並びました。みんなそれぞれのネットワークを活かして調達されてきたものです。また、途中降り出した生憎の雨をしのぐため、あつという間に3基のテントが設営されました。チームワーク、ネットワーク、機動力には目を見張るばかりでした。こうした力が、北海道の教育活動の推進に寄与しないはずはありません。

侮るなかれ「飲んだくれ達」の底力！


事務の改革を通じた 学校活性化の実践

高妻三郎・著 B5判/128ページ/定価2,100円/ISBN4-7619-1001-1

事務職員が「学校にいる意味」を、学校図書館パソコンシステムの導入、ガラス透明化等の防犯対策など、具体的な実践で示した事例集。

主な内容

- I. 中霧島小学校における実践の記録
- II. 学校事務の改革を通して学校を活性化するための実践記録

 学事出版 ●ご注文はお電話か 03-3253-4626 / FAX ☎0120-655-514 <http://www.gakuji.co.jp>